

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2015 春号

70

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 木津遺跡発掘調査



特集 木津遺跡発掘調査

はじめに

木津遺跡は、海南市木津に所在する遺跡です。瓦が出土していることから室町時代の寺院跡とみられていましたが、これまでの発掘調査は実施されていなかったため、詳しいことはわかっていませんでした。

今回の発掘調査は、国道424号の道路改良工事に伴うもので、南北に長く延び



図1 木津遺跡の位置

る丘陵（標高70m程度）の東側斜面にあたる、面積2,822㎡について実施しました。



写真1 検出された掘立柱建物の柱穴 北から



写真2 掘立柱建物柱穴内の礎板

調査成果

今回の調査成果で注目されるものとして、掘立柱建物（表紙写真）があります。掘立柱建物は地表に穴を掘り、これに柱を据えた建物のことですが、木津遺跡で検出された柱穴の一部には、直径30～40cm、深さが40～50cmのものがあり、これらは地山の比較的堅いところまで深く掘り込まれていま

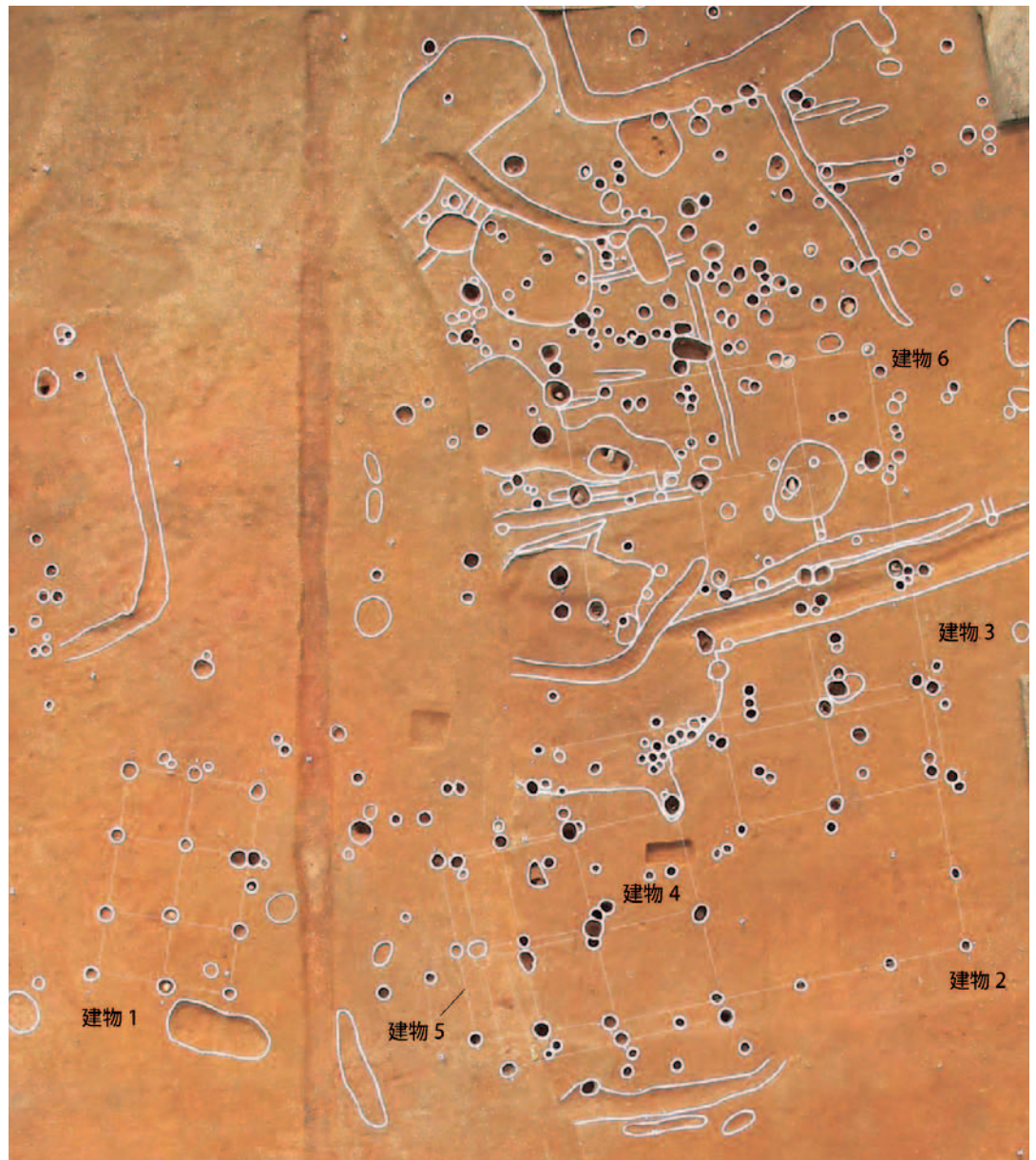


写真3 掘立柱建物（建物1～6）柱穴等 航空写真（上が南方向）

した。また、柱が地中に沈み込むことを防ぐための石（礎板）が据えられたものもあり（写真2）、そういった例を含む多数の柱穴の配置状況からは、少なくとも7棟分

の建物を復元することができました（写真3）。ただし、いくつかの建物（建物）は重複していることから、何度か建て替えた可能性があり、同時に存在した建物の数は、

もっと少ないとみられます。また、柱穴付近における瓦の出土量は少なく、これらの掘立柱建物は茅葺や板葺であったと考えられます。

遺構は、13～14世紀頃の瓦器や陶器といった遺物を含む遺物包含層に覆われており、さらにその埋土中からもその遺物包含層とほぼ同時期の遺物が出土したことから、時期は鎌倉時代末から室町時代頃のものと考えられます。遺物には東海地方（瀬戸・美濃）で焼かれたとみられる陶器（写真6）や、備前焼の播鉢もありました。ただ、地表面からは16世紀頃の遺物も採取されていますので、16世紀頃まで建物群が存続した可能性もあります。

なお、調査区の北端は北に向かって下る斜面となっており、ここにも13～14世紀頃の遺物包含層が厚く堆積していたことから、遺跡の範囲は、ここから南端で検出した通路状遺構までを含む、少なくとも南北約100mにわたるものと推定されます。

調査区南端では、幅20～30cm程度の細い溝状遺構が2条検出されました（写真4）。この溝状遺構は南西から北東方向にかけて

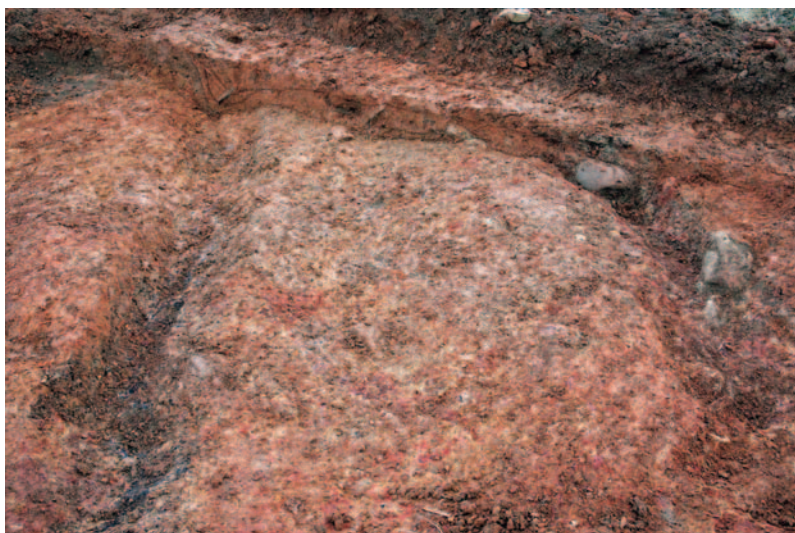


写真4 43 通路状遺構（西から）

1.5 m程度の幅を保ちながら平行に延びており、それに挟まれた部分の表面には固く締まった箇所（硬化面）があり、そこに露出した礫の表面には著しい磨滅が認められました。さらにその直上には厚さ数㎝程度の薄い泥の堆積もみられたことから、この遺構は、道路或いは通路であった可能性があります。この通路状遺構の硬化面上や溝状遺構内に堆積した土には焼土塊や炭化した



写真5 通路状遺構遺物出土状況（西から）

今回の発掘調査では、鎌倉時代末以降と考えられる時期の瓦、瓦器、陶器、土師質土器等が出土しました。瓦は調査区の北端、南端等3箇所において、いずれも廃棄されたとみられる状況で出土していますが、これらの瓦を含む遺物の時期や特徴は共通しており、木津遺跡では少なくとも南北約

まとめ

た小さな木片等が含まれ、自然石や瓦、土器が集中して出土しました（写真5）。



写真6 遺物（陶器）出土状況（西から）

100 mにわたる範囲において、一定の時期に複数の建物や溝などの施設が存在していた可能性が高いといえます。ただし、通常瓦葺きの建物に伴うはずの礎石は今回確認されておらず、後世に削平された可能性もあります。しかし、今回調査を実施した範囲の外に存在する可能性もあり、まとまった瓦の出土は、少なくともこの近辺に瓦葺きの建物が存在したことをうかがわせるものです。遺構は、調査区のほぼ全体において検出されましたが、西側に集中する傾向が窺え、



写真7 遺物（瓦器）出土状況（東から）



写真 8 4 石組遺構（東から）



写真 10 50 溝状遺構遺物出土状況（南から）



写真 9 67 溝状遺構（西から）

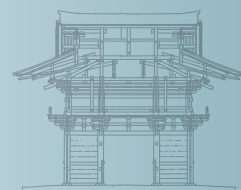


写真 11 軒丸瓦・軒平瓦

丘陵上の、より標高の高い場所に向かって展開すると想定されます。遺構の性格を確定できるものは見つかっていませんが、鎌倉時代末頃において瓦が使用される建物は、ほぼ有力武士等の居館或いは寺院に限られることから、こういった施設に関わるものである可能性が高いと考えられます。

木津の地名は木材の集散地として河港があったことによると伝えられるように、木津遺跡周辺は貴志川の水運に関わる水陸交通の要衝であったといえます。さらにその西の日方・名高の浦を望む位置には中世の寺院跡である禅林寺坊院跡や、山名氏土居跡、大野城跡、春日山城跡等多数の中世の遺跡が集中するところです。

しかしながら、今回の調査地付近に寺院や居館などが存在したという記録は、文献にも残されておらず、検出された掘立柱建物は、どのような役割を持っていた施設であるか、また、通路状遺構付近など特定の場所に瓦が廃棄されたような状況で集中して出土するのはなぜかといったこと等、今後木津遺跡についてはさらに詳細な検討が必要であると思われます。（寺西朗平）



現場紹介 〈重要文化財法音寺本堂〉

有田川町の岩野河地区にひっそりとたたずむ法音寺本堂は、室町時代の建立とされています。三間堂と呼ばれる比較的小さなお堂の茅葺き屋根が、今回葺き替えられました。

日本各地と同様に、この辺りでもかつては茅葺きの建物が多くみられましたが、今では有田川を少し遡った粟生地区の吉祥寺薬師堂（重文）が残る程度となりました。このことは、かつて近畿有数の茅場であった生石高原

のススキの植生が、他の植物に脅かされていくことにも繋がっています。茅葺き屋根の寿命は一般に



大正元年の岩野河地区
茅葺き民家が多数見える

十五年程度の

ため、かつては毎年のようにどこかで葺き替えられていたことから、

生石高原のススキ野原は現在山焼きが行われていた範囲

の三倍以上あったというのも納得です。

法音寺本堂は昭和六十三年に葺き替えが行われているので、今回は二十六年振りとなります。地元の方々が尽力され、一部に生石高原のススキを使用することができましたが、約七十五坪の屋根に約二千束と大量に必要とする中では、数パーセントに留まります。有名な生石高原のススキこそ是非活用したいところですが、春の風物詩となりつつある山焼きとの兼ね合いもあり、中々ハードルは高いようです。（結城啓司）



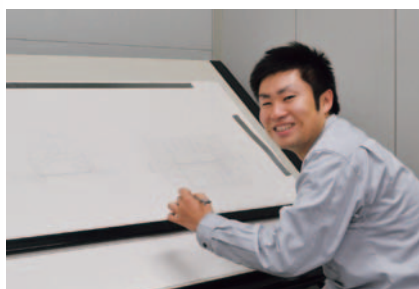
葺き替えが完成間近の屋根

新人紹介

はじめまして、昨年10月より文化財建造物課に採用されました大給友樹（おおくみ ゆき）と申します。現在、重要文化財修理事業の図面作成などの仕事をしております。

職人仕事に憧れを感じ、その流れで木造建築の修復に興味を持つようになったのがきっかけで、大学で建築史の研究室に所属していました。卒業後の数年、文化財とは関係のない職業に就いていましたが、やはり文化財に関わりたくと筑波大学大学院で世界遺産専攻に通っていました。先人の仕事と向き合い、様々な事由に対して根拠を見出すことのできる技師を目指して努力したいと思っています。

す。初めての和歌山での生活です。これで、これから沢山の場所へ出かけて魅力を発見していきたいです。今後とも、よろしくお願い致します。



日本の歴史的な建物といえ、姫路城のような壮大な城郭や、太い大黒柱や迫力ある梁組が見える民家も魅力的ですが、和歌山県下で文化財に指定されている建物を見ても、寺社仏閣が多数を占めます。その中でも神社建築は伝統的な形式を尊ぶため、通常決まった様式で建てられます。流れ造りや春日造りが一般的ですが、本宮大社や那智大社のように、固有の様式が加えられているものも少なくありません。そのような社殿建築において共通し、寺院建築には見られない特徴が、屋根の上に据えられた千木です。

多くの神社では、X字型の千木が屋根頂部の箱棟の上に配されるため、置き千木とも呼ばれ、鬼板と勝男木の間、勝男木の内側など納まりは様々です。その中で、室町時代の丹生都比売神社本殿においては、鬼板の前の檜皮屋根に千木が直接置かれます。さらに本殿の中には鎌倉時代の宮殿が残されており、ここでは破風板の上に千木が置かれ、古式を伝えるものと考えられます。伊勢神宮の千木は破風板の延長であり、その原型が4世紀頃に造られた家屋文鏡にも確認できるのです。

名所図会や古写真でみる明治以前の神社は開放的で、社殿の間近まで行き来できたようです。しかし社殿の前に大きな拝殿や幣殿が盛んに建てられた昭和初期には、建物越しに見える千木の姿から、そこに御座す存在をイメージしたそうです。見えがたいものにこそ宿るものがあるのかもしれない。(多井 忠嗣)



山の稜線のような檜皮屋根に並び立つ千木
重要文化財熊野那智大社の7棟の社殿群

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

発掘屋余話 ②9 考古ボーイ

考古学者の設楽博巳さん（東京大学）が、「考古ボーイ」の絶滅危惧種化を憂う文章をブログだったかに綴っておられました。

「考古ボーイ」というのは、まあ、なんというか、遺跡の周辺をうろついて土器の破片だの石器を拾い集めて興じる子ども们的ことですね。一種のオタクなのでしょうが、最近見かけなくなりましたね。たしかに絶滅危惧種です。

設楽さんは、ふるさと・前橋での考古ボーイだった時代をなつかしく述懐しておられましたが、設楽さんなら筆者と同年輩のはずです。昭和40年前後のことでしょうね。この世代は多いですよ。当センターにも「考古ボーイ」出身というべきかなれの果て（失礼！）ともいべき技師が何人かおられます。

筆者が知る限りでは、作家の司馬遼太郎さんもそうでした。歴史紀行の名著『街道をゆく』のなかで述べておられますが、母方の実家が奈良県の葛城ということもあって、夏休みなどに帰った折には、一日中近くの田圃や畑を歩きまわり、石鏃や土器の破片を探しておられたとか。そのせいか司馬さんは考古学のよき理解者、応援団のひとりでした。紀行のなかでも考古学の成果を紹介してくださったり、地方で発掘調査に当たる技師との出会いをつねにあたたく書いておられます。（はずかしながら筆者も登場してますよ）

ともかく未来の考古学者のみならず応援団を育てるためにも「考古ボーイ」の存在はかせませません。ここはひとつみんなで種の保存をはかることにしましょうか。

——「以下、無用のことながら」、『街道をゆく』の初版本を筆者は持っています。この装幀は民芸運動の大家でもあり染色家として知られる人間国宝の芹沢銈介さん。そのご子息は、旧石器の研究として著名な考古学者・芹沢長介さんですね。

（村田 弘）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報（2015 年 春～ 2015 年 夏）

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春期企画展「紀ノ川の青い石」 2015年 3月 3日（火）～ 6月14日（日）

和歌山県立博物館

- 企画展「みほとけのすがた」 2015年 3月14日（土）～ 4月19日（日）
- 春期特別展「高野山開創と丹生都比売神社－大師と聖地を結ぶ神々－」
2015年 4月25日（土）～ 6月 7日（日）
- 特集展示「高野山と有田川流域の仏教文化」 2015年 4月25日（土）～ 6月 7日（日）

高野山霊宝館

- 開創法会期間限定特別公開「高野山三大秘宝と快慶作孔雀明王像」
2015年 4月 2日（木）～ 5月21日（木）
- 高野山開創1200年記念展「初公開！高野山の御神宝」前期 2015年 3月21日（土）～ 5月21日（木）
後期 2015年 5月30日（土）～ 7月 5日（日）

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。



目次

- 1 表紙 「木津遺跡 調査区1 航空写真（東から）」
- 2 特集 「木津遺跡発掘調査」
- 6 文化財建造物課 短信 「現場紹介 ～重要文化財法音寺本堂～」 「新人紹介」
- 7 きのかに歴史小話「古建築修理の逸話① 千木」
「発掘屋余話② 考古ボーイ」
- 8 催し物案内

風車70（2015・春号）

平成 27 年 3 月 25 日

（公財）和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

（公財）和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
maizou-1@wabunse.or.jp

2014 年 7 月 1 日より、事務局が上記の住所に移転しています。